

幼児教育における利他的行動の教育方法論の考察 学際的な文献レビューを踏まえて

A study of the altruism education in early childhood education
based on interdisciplinary literature review

兼平 友子^{*} ゲン・チ・ギア^{**}
Tomoko KANEHIRA^{*} Chi Nghia NGUYEN^{**}

^{*}青森中央短期大学幼児保育学科 ^{**}青森中央学院大学経営法学部

^{*}Department of Infant Education, Aomori Chuo Junior College

^{**}Faculty of Management and Law, Aomori Chuo Gakuin University

Key words：幼児教育、利他的行動、教育方法論、発達、幸福

1. イントロダクション

利他的行動は、経済学の説明に基づけば、その行動によりもたらされる利益がその行動に費やす時間や労力という損より、大きく見込まれかつ行われる、損得勘定に基づく行動である（Becker, 1976）。しかし、子育てや血縁関係のない遭難者の救助等、個人的な利益を犠牲にしてまで行う行動が社会生活の中でよく観察されるため、損得勘定の理論だけで利他的行動を説明するには限界がある（兼平&ゲン、2022；ゲン、2023）。本稿は、兼平とゲン（2022）が示した利他的行動の定義『個人的な利益を第一目的とせず、個人的な費用を負担する、または、個人的な利益を犠牲にしても、意図的に他の生物に利益をもたらす行為』を採用する。他にも向社会的行動の概念もあるが、本研究はでは上記の利他的行動と同様な定義とする。よって、思いやりはその利他的行動の思考、意向と本稿で定義する。

利他的行動がその行為者の成功、幸福に寄与する論点は既に経済学、教育学や心理学で検証されているが（例えば、Becker, 1976；Heckman, 2013など）、先行研究は成功、幸福と利他的行動の関係性の考察に力点を置いているという特徴があり、利他的行動の習得や教育方法論の考察においては充分に行われているとは言えない。

本稿は、上記の課題を考察するために、以下の通り進めていく。初めに幼児教育研究だけではなく、他の研究領域、研究分野をも対象とし、思いやり、利他的行動の教育方法に関する先行研究とその限界を考察し、幼児教育における思いやりの教育方法論の体系化にかかわる課題を抽出する。最後に幼児だけではなく多世代の成功、幸福につながる思いやり、利他的行動の教育方法論の体系化につ

いての示唆を述べる。

2. 先行研究のレビュー

2. 1 幼児の発達、幸福に寄与する利他的行動の科学的根拠（A）と今後の研究焦点

*成功、幸福に焦点を当てる海外の研究

幼児期から40代のへの成長の追跡調査を基に考察した2000年にノーベル経済学賞受賞者であるジェームズ・ジョセフ・ヘックマン教授は、人生の成功（技術を持つ技能労働者への成長、生涯賃金の高いこと、病気や犯罪の少なさ）が、根気強さ、注意深さ、意欲、忍耐力、自立心、自己肯定感等の自分に関する力の他に、協調性、共感性や思いやり等の人とのかかわる力に支えられるという結論を指摘した。よって、これらの資質・能力は幼少期から教育すべきものである。

心理学研究においては、人間の成功要因、能力の差が、知能指数（Intelligence Quotient, IQ）ではなく、感情的知能（Emotional Intelligence, EQ）によりもたらされることが立証されており（Goleman, 1995）、多くの研究により検証されている。EQの中には、自己を超えた、他者への共感、感情の理解や組織の認識等の社会的認識も強調されている。本稿では、利他的行動の教育方法論を考察しやすいよう、この社会的認識を思いやりと同様な定義で捉える。

しかし、兼平とグエン（2022）が指摘したように、これらの研究は幼児を対象とした利他的行為と発達、幸福、成功との関係に関する詳細な考察が少ないため、更なる考察が必要である（焦点1）。

焦点1：幼児を対象に利他的行為と発達、幸福、成功との関係を考察する。

*幼児の発達に着目する日本の研究

日本では、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」といった5つの発達の領域及び幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を中心に、幼児の資質・能力の育成が行われている。その中で、幼児教育現場では、幼児の利己を超えた「思いやり」「集団、全体の利益の尊重」等の資質目的で、並んで順番を待つこと、遊んだ玩具は元の場所に返すこと、使用後のスリッパを揃えること、花育、生き物の飼育、若者・高齢者との寄り合い等の様々な活動が展開されているが、これらの教育活動は幼児の発達、幸福に寄与する科学的根拠に基づく教育方法論というより幼児教育思想に基づくことが主流である。他方、これまでの社会心理学研究のほとんどは高齢の利他行為者に着目しており、幼児に焦点を当てた幼児の発達と利他的行為との関係性についてまだ十分に考察していない（兼平&グエン、2022）。

そこで高木と竹村（2014：80-81）は、1985年以降20年間に渡る日本の利他的行動に関する研究を考察した結果、今後の研究課題3点を提示している。

・課題1：利他的行動の習得・獲得が行われていく過程がまだ解明されていないため、更なる考察が必要。

・課題2：青年期や成人期に向社会性がまだ不明である。発達心理学の研究は、幼稚園児や小学生を対象とした研究が多いが、中学生や高校生を対象とする研究がまだ少ない。

・課題3：社会心理学の研究成果が子どもの対象にも当てはまるかを確認する必要がある。

よって本稿は、幼児教育における利他的行動の教育に関しては、課題1で示される、科学的根拠に基づく利他的行動の習得・獲得の過程だけではなく、その過程が必ず幼稚園児の成功、幸福に寄与す

るという前提で考察される必要があることを主張する（図1の【A】）。

また、高木と竹村（2014）が課題3で指摘したように、幼児を対象とする社会心理学の応用可能性の検証が必要である。兼平とグエン（2022）は、文献レビューの結果、例えば、高齢の利他的行為に関する社会心理学研究は、利他的行為が高齢者の心身の健康をもたらすという研究データをオーストラリア、アメリカやヨーロッパ等の多くの国で得られてはいるが、幼児に焦点を当てた幼児の発達と利他的行為との関係性についてまだ十分に考察していないことを指摘した。この科学的根拠【A】をより一層考察するために、社会心理学の応用可能性の考察だけではなく、本稿は、幅広く他の研究領域、研究分野の研究成果を対象とし（焦点2）、分野を横断した考察、相互の補完性の考察を通じて幼児教育への応用の可能性を検証する必要性を主張したい（焦点3）。

焦点2：他領域、他分野の研究成果の応用可能性を考察する

焦点3：分野を横断した考察、相互の補完性の考察を行う

図1：幼児の発達、幸福に寄与する利他的行動の教育法論の構築のイメージ



このように、幼児の発達、幸福、成功に寄与する利他的行動の科学的根拠（A）を構築するために、少なくとも焦点1、2、3を考察する必要があることを本稿は主張したい。

表 1：思いやり、利他的行動に関する先行研究と本稿の貢献

	研究領域・分野	主な考察対象	到達ゴール	科学的根拠		本稿の貢献
				主な論点	限界	
科学的根拠 A	利他的行動が幼児の発達、幸福に寄与	教育経済学	人生の成功	思いやりを含む非認知能力が人生の成功に寄与する	幼児を対象に利他的行為と発達、成功、幸福の関係に関する詳細な考察が少ない。	焦点 1『幼児を対象に利他的行為と発達、幸福、成功との関係を考察』を抽出
		心理学	成功、幸福	思いやりを含むポジティブ心理、感情的知能が成功、成功に寄与する		
		社会心理学：ポジェーディング	健康的に年を重ねること	利他的行為が心身の健康に良い影響を与える	幼児を対象とする研究が少ない	
科学的根拠 B	利他的行動の教育方法論	日本幼児教育研究	幼児の発達、社会の一員への成長	「道徳性・規範意識の芽生え」「集団、全体の利益の尊重」「社会生活と関わり」の教育	・人生の成功、幸福との関係が曖昧 ・教育思想ベースが主流	焦点 2『他領域、他分野の研究成果の応用可能性を考察』 焦点 3『分野を横断した考察、相互の補完性を考察』 焦点 4『利他的行動の習得過程の科学的根拠』
		心理学研究	利他的行動の養成	・利他的行動の成功経験 ・誘導型の教育		焦点 5『特定の教育内容、方法の科学的かつ体系的な考察が必要』を抽出 『成功体験』『誘導型の教育』を 焦点 1，2，3，4での考察を試みる

出所：兼平&グエン（2022）を加筆修正

2. 2 利他的行動の教育方法論に関する科学的根拠【B】と今後の研究焦点

これまでの利他的行動に関する研究は、利他行為者の成功、幸福とその行動の関係性の考察に焦点を当てることが多く、思いやりや利他的行動が事前に習得されているという想定で考察されており、その習得過程を科学的に解明する研究がまだ少ない（焦点4）。この焦点4も日本における利他的行動の研究課題の一つである（高木&竹村, 2014）。また、幼児の発達、幸福、成功という観点で考えると、いかに科学的かつ体系的にこれらの教育目標を達成できる利他的行動（科学的根拠【A】）を教育していけるのかという教育方法論（図1の【B】）の構築が研究の焦点となる。

焦点4：利他的行動の習得過程の科学的根拠

また高木と竹村（2014）ではいくつかの子ども向けの利他的行動の教育方法論のポイントが提示された。

・教育のポイント1：『誘導型の教育』（高木&竹村, 2014：77, 78）

誘導型の教育は親によるしつけだけではなく、幼児教育現場における保育者による教育も含むものである。教育内容は共感、規範的責務感である。ここで、共感とは『相手と感情を共にすること』と定義される（高木&竹村, 2014：77）。

他人の苦痛が幼児による行動に引き起こされた場合、体罰ではなく、他人の視点の強調、他人の苦痛の指摘を通じて、その苦痛が子どものした行為によるものであることを、相手の立場に立ち、考え、理解させるという、共感をもとにした罪責感への誘導という教育方法である。

また、困った人を助けたり、親切にしてくれた人に親切で返したりするという規範的責務感を見に付けさせることも大切である。

・教育のポイント2：『成功体験』

成功体験は、幼児に利他的行動に必要な具体的スキルや利他的行動の人助けの能力を自ら持っていると感じる自己効力感を身に付け、今後の利他的行動に影響を及ぼすものである。

科学的根拠に基づく利他的行動の教育方法を構築するために、上記の教育ポイントをより科学的かつ体系的に考察する必要があることを本稿は主張したい。ただし、上記の教育ポイントを考察することができたとしても、誘導型の教育や成功体験は利他的行動の教育方法の全てではなく、あくまでもその一部に過ぎないと考えられる。科学的かつ体系的な教育方法を構築するためには、多くの内容、方法論の結合が必要になってくる。そのため、その土台の一部を築くものとして、本稿は誘導型の教育や成功体験の更なる考察を研究焦点として提示した。

焦点5：利他的行動の教育にかかわる特定の内容、方法（例えば、誘導型の教育と成功体験）の科学的かつ体系的な考察が必要。

3. 考察

3. 1 科学的かつ体系的な利他的行動の教育に向けて

科学的かつ体系的な利他的行動の教育に向けて、本稿で議論した5つの焦点を考察する必要がある

る。以下の通りその研究焦点を再掲する。

焦点1：幼児を対象に利他的行為と発達、幸福、成功との関係を考察する

焦点2：他領域、他分野の研究成果の応用可能性を考察する

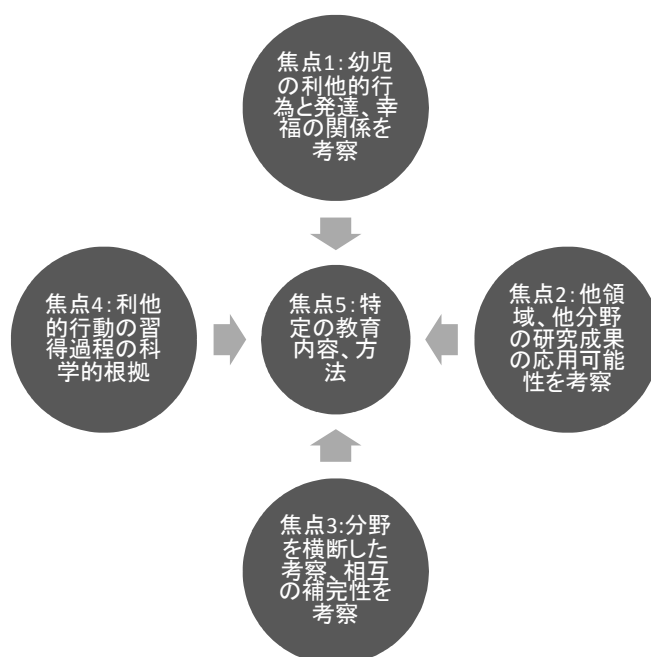
焦点3：分野を横断した考察、相互の補完性の考察を行う

焦点4：利他的行動の習得過程の科学的根拠

焦点5：利他的行動の教育にかかわる特定の内容、方法（例えば、誘導型の教育と成功体験）の科学的かつ体系的な考察が必要

焦点1，2，3，4を特定の教育内容、方法で考察できた場合、その教育内容、方法の科学的根拠【A】と【B】を保証することができる。よって、その教育内容、方法（例えば、誘導型の教育と成功体験）が幼児の利他的行動を促す、そして、幼児の発達、幸福に繋がると期待できる（図2）。

図2：幼児の利他的行動の科学的かつ体系的な教育方法論のイメージ



兼平とグエン（2022）が論じたように、日本の幼児教育の教育課程は、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域、さらに、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿などをベースに展開されていること、また幼稚園教育要領・学習指導要領からは、「社会の一員になるためにふさわしい資質と能力を身に付けること」を目指すものであると捉えることができる。しかし、幼児の発達と利他的行為の関係生および教育方法論に関する科学的根拠や実証研究がまだ少ないため、これらの資質・能力や幼児保育現場で展開されている様々な活動を本稿で強調した焦点を用いて検証できれば、日本の幼児教育における利他的行動の教育方法論をより一層確立することができると期待できる。

3. 2 科学的かつ体系的な利他的行動の教育方法論の構築に向けた一試み

3. 2. 1 『誘導型の教育』の再考の一例（表2）

・焦点1の考察

幼児の発達に注目する日本の幼児教育の教育課程で重視される（幼児期の終わりまでに育ってほしい）10の姿などと、海外の研究で幸福、成功の要因として強調される資質・能力の共通点を考察した結果、思いやりや利他的行動がその接点の一つである。ある意味では、利他的行動が幼児の発達、幸福、成功にも繋がると期待できる。

表2：誘導型の教育の再考の一例

誘導型の教育	焦点1	焦点2	焦点3	焦点4
	発達、幸福、成功との関係	他領域、他分野の研究成果の応用可能性	分野を横断した考察、相互の補完性の考察	利他的行動の習得過程の科学的根拠
<ul style="list-style-type: none"> ・共感をもとにした罪責感への誘導 ・他人の苦痛の理解、助力に向かう行動規範的責務感 	日本の研究と海外の研究の接点	脳神経科学：オキシトシンというホルモンの増加が利他的行動を促す。	『恐れや心配』に敏感な者は、より一層他人の恐れや心配に敏感になり、利他的行為に繋がる。	心配観や痛みに関感を持たせる言葉遣い、顔の表情という教育活動

・焦点2での考察

兼平&グエン（2022）が心理学や脳神経科学で考察したように、利他的行為とオキシトシンホルモンは関係性があり、オキシトシンホルモンの増加が人間の利他的行為を促すという効果がある。

・焦点3での考察

そのため、誘導型の教育では、共感をもとにした罪責感、他人の苦痛の理解、助力に向かわせる誘導をより効果的に展開するために、いかにオキシトシンホルモンを増加させるのかが重要である。脳神経科学の研究によると、『恐れや心配』に敏感な者は、人間の利他的行為を促すオキシトシンというホルモンの増加によって、より一層他人の恐れや心配に敏感になり（共感）、その結果、利他的行為に繋がる、と言われている。利他的行動の教育では、幼児保育現場だけではなく幼児の日常生活全般において親や保育者が大切にすべき玩具、親切にすべき友人関係や困っている人等の代わりに、ちょっとした心配観や痛みに関感を持たせる言葉遣いや顔の表情を誘導的に幼児の前で行うことによって、利他的行動に繋がると期待できる。

・焦点4での考察

上記の焦点3での考察をより科学的に追跡し、分析できれば、誘導型の教育を利他的行動の教育方法論の支柱として立証することもできると考えられる。この点は今後の研究課題の一つとも言える。

3. 2. 2 『成功体験』の再考の一例

・焦点1の考察

助力の成功体験について、日本の幼児教育の教育課程は5領域と10の姿などをベースに展開され、幼稚園教育要領・学習指導要領にも明記されているように、あくまでもこれらの資質・能力の養成目

標は「幼児期の終わりまでに育ってほしい」となっている。これは必ずしも、または、絶対的に達成しないといけないという絶対値ではないことが読み取れる。そのため、利他的行動の成功体験は幼児にとって具体的スキルや自己効力感の養成機会となるが、助力に成功しなかったとしても様々な意味がある。例えば、幼児の興味、行動可能な範囲等に適したものか、失敗から何が学べるのか、を踏まえ、より効果的な利他的行動の教育にも活かすべきことを本稿は主張したい。

・焦点2の考察

【幼児の資源の探究】

経営学研究では、資源という言葉がよく使われており、資源理論も経営学研究の重要な一柱である。資源は特定の活動に活用できるものとして捉えることができる。その定義は組織だけではなく、個人にも応用可能なものである。経営学研究で論じられている資源の特徴と幼児に当てはめる場合の特徴は以下の表3にまとめられた。

表3：幼児教育研究への資源理論の応用

経営学研究における資源理論の特徴の一部	幼児教育研究への応用
一次元ではなく、複数の単位に細分化されるもの	身体特徴、能力、得意なこと、感心、意欲
強化可能な範囲	無理のない範囲で既存の資源を強化したり、新たな資源を発掘したりする
他資源との相互補強の関係で活用可能になる	一人で利他的行動に向かわせるのではなく、複数の幼児で個々の弱点の克服と強みの出し合いによる利他的行動

出所：グエン（2019）を参考に作成

【失敗経験への対応】

学習性無力感とは、心理学者セリグマンらが1967年に発表した心理学理論である。失敗を繰り返すつづけると、その行動者には「どうせできないから」「自分にはできる能力がない」等の無力感を学習してしまい、結果、自己効力感、パフォーマンスも低下し、様々な活動、課題に挑む意欲も失ってしまう（Peterson, Maier&Seligman, 1993）。

そのため、利他的行動の成功体験は大切であるが、その行動に失敗した場合でも、学習性無力感を芽生え、拡大させないように、幼児が自ら行動したことに対する達成感を味わわせたり、行動したことをほめられると幼児の自信にもつながると考えられる（表4）。

表 4：『成功体験』の再考の一例

成功体験	焦点 1	焦点 2	焦点 3	焦点 4
	発達、幸福、成功との関係	他領域、他分野の研究成果の応用可能性	分野を横断した考察、相互の補完性の考察	利他的行動の習得過程の科学的根拠
具体的スキルや自己効力感の養成	成功体験は絶対値ではない。	<ul style="list-style-type: none"> ・経営学：幼児の資源、行動可能な範囲を発掘、理解 ・心理学：学習性無力感を避ける 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の資源、行動可能な範囲を考慮した利他的行動の調整 ・失敗しても行動したことをほめ、自己肯定感を養う 	行動したことによる達成感が自己肯定感につながる理論は既に立証されている。

・焦点 3 の考察

幼児の資源（強み、行動可能な範囲、強化可能な範囲）を活かし、幼児の興味・関心に合わせ、利他的行動の設計、仕掛けをしていく。失敗の場合でも、その行動したことをほめ、その行動で満足するという達成感を覚えさせる工夫が必要である。

・焦点 4 の考察

行動したことによる達成感が自己肯定感につながる理論は既に立証されているため、科学的根拠がある意味では保証されている。科学的根拠を強化するために、焦点 3 で述べられた教育方法の効果を追跡的に検証することも良い取り組みである。

4. 結論

利他的行動が幼児の発達、幸福、成功に寄与することがこれまで多くの思想ベース、理論ベースの研究で述べられているが、まだ科学的に十分に検証されているとは言えない。より科学的かつ体系的な利他的行動の教育には、本稿では 5 つの研究焦点を同時に考察する必要性を指摘した。その考察ができれば、日本だけではなく海外の幼児教育研究と実践における利他的行動の教育方法論をより一層確立することができると期待できる。

謝辞：本研究は青森中央短期大学共通研究費により助成を受けたものである。

参考文献

- Andrea, O. (2015, May 04). What the Dalai Lama Taught Daniel Goleman About Emotional Intelligence. *Harvard Business Review*, Retrived from <https://hbr.org/2015/05/what-the-dalai-lama-taught-daniel-goleman-aboutemotional-intelligence>
- Barsade, S., & O'Neill, O. A. (2016). Manage Your Emotional Culture. *Harvard Business Review*, 94, 14.
- Becker, G. S. (1976). *The Economic Approach to Human Behavior*. Chicago, USA: The University

of Chicago Press.

Goleman, D. (1995). *Emotional Intelligence: Why it Can Matter More Than IQ*. New York, NY: Bantam Books. (土屋 京子訳『EQ こころの知能指数』講談社、1998年) .

Heckman, J. J. (2013). *Giving Kids a Fair Chance*. Cambridge, MA: The MIT Press. (古草秀子訳『幼児教育の経済学』東洋経済新報社、2015年) .

兼平友子 & グェン チ ギア (2021) 「幼児の発達における利他的行為の教育的効果に関する学際的考察」青森中央短期大学 研究紀要 第35号。

グェン チ ギア (2019) 「資源制約への対応：ブリコラージュ理論の再検討と修正」組織科学53 (1), 37-52.

Nguyen Chi Nghia (2021). *Rangers: Exploring my own values and my own capital, and designing my own context to achieve happiness*. Aomori, Japan: Mononome-sha.

グェン チ ギア (2023) . 「制約対応と心理マネジメントを科学するー予測不能な事態に備える能力の探究」ものの芽舎。

Peterson, C., Maier, S. F. & Seligman, M. (1993). *Learned Helplessness: A Theory for the Age of Personal Control*. New York, NY: Oxford University Press. (津田彰訳『学習性無力感ーパーソナル・コントロールの時代をひらく理論』二瓶社、2000年) 。

高木修・竹村和久編 (2014) 「思いやりはどこから来るの？利他性の心理と行動（心理学叢書）」誠信書房。